

博士論文(要旨)

# 動詞の音便の方言学的研究

—サ行イ音便を中心として—

東北大学大学院文学研究科 言語科学専攻

坂喜美佳

本論文は、「サ行イ音便」という現象を対象とし、方言学の立場から調査・考察を行うことで、改めてこの現象がもつ特徴やその影響を明らかにしようとするものである。

第1章では、本論文の導入として、サ行イ音便について述べ、それをふまえて、本論文の目的や方法を提示した。本論文の主たる目的を、〈サ行イ音便の、日本全国での分布形成過程を推定するとともに、サ行イ音便の影響で成立した語の成立過程を明らかにすることで、従来主として中央語文献を資料として研究されてきたサ行イ音便を、方言学の視点から新たに捉え直し、方言上、どのような現象として現れるのかを明らかにする。〉ことと設定した。この目的のために用いる方法や、本研究が持つ意義についても述べた。

第2章では、これまでのサ行イ音便研究において、サ行イ音便がどのように取り上げられてきたかを概観した。中央語文献・方言・その他の分野で数多くの研究がなされているものの、研究が盛んに行われているテーマではなく、停滞している状態であると言える。また、サ行イ音便の消失ばかりが注目されており、いくつかの点において十分でないといえる。

また、サ行動詞において音便化しない語群については、4つにまとめ、本章以降「中央語規則」と呼び基準とすること、その中央語規則にも時代別の段階があったことを述べた。

第3章では、中央語と方言に現れる動詞の音便の関係を明らかにするため、動詞の音便を横断的に扱い、音便化しないことも含めた音便現象の地理的・歴史的分布の形成について考察を行った。すなわち、動詞の音便を扱った地図や中央語文献の先行研究を用い、それらを俯瞰的に総合することで、大まかに方言と中央語に現れる音便の関係を捉えることを目的とした。その結果、GAJによる音便の地理的分布と、先行研究による中央語における変遷から、音便は西日本だけで言えば、周圈的な分布で現れること、音便の地理的分布は、中央語の歴史的変遷と対応していることが明らかになった。

続く第4章・第5章・第6章では、それぞれ富山県・鹿児島県・高知県において、サ行五段動詞の音便・非音便を調査し、その結果を元にサ行イ音便の実態とその成立について考察した。その結果をまとめて横断的に見た第7章では、まずGAJを用い中央語規則①がどのように全国に分布するのかを、地図を作成して見た。その地図を元に仮説を立てたが、今回の記述調査の地点では、ABCDの全てのグループを検証することはできなかった。そこで第4章から第6章までの記述調査の結果を横断的に比較し、上掲の中央語規則が地理的にどう反映されているのかを考察した。結果、以下の2点が明らかになった。

- (1) Bグループである富山県の結果と鹿児島県・高知県の結果を比較すると、富山県は全域で中央語規則に比較的従っている。Bグループに含まれる地域では、中央語を保存しているため、中央語規則を守っている地点が多いのではないかと予想される。
- (2) Cグループである鹿児島県・高知県では、比較的中央語規則に従わない。その従わない内実も異なっており、高知県では規則に関係なくすべての語が音便形になってしまう崩壊の仕方をしているのに対して、鹿児島県では、比較的従っている地点も一部あり、また全て非音便形となる地点、高知県のように全て音便形となる地点と、地点によって様々な崩壊の仕方をしている。

第8章・第9章では、サ行イ音便が影響して成立したと考えられる特定の語に焦点を当て、形態論的な面から特徴を記述するとともに、その成立過程について考察した。具体的には「返す」に対応する方言形「カヤス」「咲く」に対応する方言形「サス」を取り上げた。「返す」の意の「カヤス」という事例は、サ行イ音便の影響を受けて語幹を変えた現象であったが、「咲く」の意の方言形「サス」は、サ行イ音便の影響を受けて別の活用を作り出す現象の事例として論じた。「カヤス」と「サス」は同じサ行イ音便が影響して成立した語ではあるものの、その成立過程は大きく異なる。それぞれ個別の事情を勘案し成立過程について考察を行った。

以上、各章における結果をまとめた。本論文の意義としては、まず、本論文の全体に関わることとして、通時・地理両面の掛け合わせの視点から音便現象を捉えたことである。特に第3章において、文献での現象、方言での現象と別個に扱うのではなく、その両面を掛け合わせることで、これまでの史的考察や個別の方言記述を、地理的な広がりに関連付けて捉えた点が新しく、音便研究において意義はあったのではないかと考える。

次に、サ行イ音便の実態を記述するため、主要地点に赴き調査を行ったことである。特に第4章・第5章・第6章において、富山県・鹿児島県・高知県の多くの地点に訪れ、記述調査を行った。これまで文献中心に進められてきたサ行イ音便の研究に、方言学の視点を導入したことは本論文のひとつの特色である。文献を資料とした調査・研究では、限られた動詞についてしか知ることができないが、サ行イ音便が残存する地域に赴いて記述調査を行えば、未調査の動詞を調査することができる。

また、音便現象が影響して成立した語があるという新しい報告を行ったことも挙げられる。このような語の存在は、各地方言の概説書などで触れられるのみであり、あまり注目されてこなかった。語の成立までを考察した研究は今までにない。従来、サ行イ音便の内部に留まっていた関心を、この現象に影響されて成立した語の考察に拡大することで、音便史と語彙史の交渉について検討した点も、本論文の意義であると言える。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	坂喜美佳
論文審査担当者	<p>(主査) 教授 小林 隆  教授 齋藤 倫明  教授 大木 一夫  教授 後藤 斉  准教授 甲田 直美</p>
論文名	動詞の音便の方言学的研究—サ行イ音便を中心として—
<p>本論文は、サ行イ音便を中心に、動詞の音便に関わる諸現象を方言学的に考察するものである。全体は10章から構成される。</p> <p>第1章・第2章は、本論文にとっての序論にあたる。第1章「研究の背景と目的」では、本論文の導入としてサ行イ音便の地理的分布について概観し、その上で、本論文の目的や方法を提示する。第2章「サ行イ音便はどう取り上げられてきたか」では、これまでのサ行イ音便に関する先行研究について検討し、その知見と課題を把握するとともに、本論文の分析の基準となる歴史的な中央語規則について整理する。</p> <p>第3章から第9章までは本論にあたる部分である。第3章「動詞の音便の地理的・歴史的分布」では、サ行イ音便の位置づけを理解するために動詞の音便を総合的に扱い、音便化しないことも含めた音便現象の地理的・歴史的分布の形成について考察する。第4章「富山県におけるサ行イ音便」、第5章「鹿児島県におけるサ行イ音便」、第6章「高知県におけるサ行イ音便」では、サ行イ音便に関して典型的な様相を示す3つの地域を取り上げ、それらの地域におけるこの現象の実態を記述的調査によって明らかにするとともに、その成立についても考察する。第7章「サ行イ音便における中央語規則の地理的対応」では、第4章から第6章までの記述的調査の結果を総合的に取り上げ、歴史的に中央語に存在した中央語規則が地理的にどう反映されているのかを考察する。第8章「「返す」のサ行イ音便と「カヤス」の成立」、第9章「「咲く」の方言形「サス」の成立」では、サ行イ音便が影響して成立したと考えられる特定の語に焦点を当て、その特徴を記述するとともに、成立過程についても考察する。</p> <p>最後に、第9章「本論文のまとめ」では、各章における論述を全体的に振り返りながら、あらためてこの研究の成果と意義を述べ、また、本論文で解決までに至らなかった問題点や今後の課題などを指摘する。</p> <p>これまで、動詞の音便、特に、サ行イ音便についての研究は日本語史の立場から進んでいたが、方言学の視点からは十分ではなかった。本論文は、そうした研究段階を踏まえ、歴史的中央語に見られる現象が、各地の方言でどう保存され、また、変容していくのかを概括的に明らかにする点に意義がある。さらに、音便現象が語の変化に影響を及ぼすことについて考察する点にも特色がある。その成果は、今後の、動詞の音便の地理的・歴史的研究の重要な基盤となりうるものであり、高く評価できる。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	